

追悼

宮地政司先生を偲んで

大正14年4月、測地学委員会は、我が国の経度を確定するとともに、大陸移動等経度の永年変化を研究するため、緯度観測所のような独立の官制の経度観測所を設立すべきであるとして、内閣総理大臣および文部大臣に建議を行なった。これは結局実現されなかったが、実現していれば今日の測地学研究組織はかなり変わっていたかも知れない。しかしながら昭和2年、測地学委員会官制が改正され、経度観測のためと明記して技師1人、技手3人を置くとして、大正13年に発足した三鷹国際報時所が強化された。その初めての技師に天文学科卒後2年、天文台技手の宮地先生が任命された。

宮地先生の消息について、私が初めて耳にしたのは、技術将校として陸地測量部に配属された昭和18年であった。南方戦線で兵科将校として転載されている宮地少尉を陸地測量部として何とか召還しようとの運動が進められていた。40歳近くになられ、国際報時所で優れた業績を挙げられていた先生が兵科将校として召集されたことにいささか疑問に感じたが、先生が大学卒業後1年志願兵として飛行連隊に入隊され、航空兵少尉として任官されていたのが大きな理由のようであった。第2次大戦では航空将校が稀少価値があったことが先生まで召集した事情のようである。陸地測量部の運動は東条総理まで届いたとのことであるが、内地帰還はならず、当時占領中のジャバ・レンバン天文台長に任命され、潜水艦で任地に赴かれたとのことである。先生の履歴書を拝見すると陸軍中尉で天文台長の任にあったようである。21年に復員された。ある人から聞いた話であるが、当時はオランダの植民地であったため、戦後レンバン天文台長に任命されたオランダ人天文学者は天文台の施設、観測成果および文書が見事に整備されているのに驚き、かつ敗戦国日本の宮地博士の人柄に感動したという。

戦後、陸地測量部は地理調査所として内務省に移管されたが、その事業の性格上、米軍地図局との接触が多かった。そのころ米軍の野外精密天文観測のテキストに報時信号伝播に関する「宮地の式」が引用されているのを奥田豊三先生が発見された。応召前の国際報時所時代の先生の業績である。奥田先生は早速、萩原雄祐先生に進進におよび、昭和23年朝日文化賞受賞の運びとなったようである。戦後打ちひしがれていた折だけに、我々には朗報であった。

昭和30年前後から、米軍地図局委託による「星の掩蔽による測地的結合」研究の委員会や、測地学審議会な

どで、先生にかなり頻繁にお会いできることにあって、親しくして頂いたことは私の人生において誠に幸いなことであった。先生は広汎な話題について話上手であったと共に、聞き上手でもあった。こちらの勝手な意見に穏やかに相槌を打って頂いたことが想い出される。

明治の学問揺籃期に、最初に国際的学術活動を行なった測地学委員会の歴史とその後の推移を、宮地先生など老先生の存命中にまとめようとの永田前測地審議会々長の発案が具体化したのは今年始めである。御健康が今年になって勝れないとのことで、浅田測地審議会々長と2人で会の運営などについて御意見を聞くために先生のお宅へ伺ったのは3月ごろであったと思う。しかし仲々お元氣そうで、医者に外出はできるだけ避けるようにといわれているだけだとのことで一応安堵した。5月に私は宮地会長の後を継いで日本測量協会々長に任命され、先生は名誉会長に推戴された。それらの行事には、元氣で出席された。7月始め、前記の「測地学研究の変遷と動向」についての第1回会議で、先生が6月末入院されて出席されないことを知らされた。数日後、御冥舞に伺ったが、意識不明とのことで面会することができなかった。殆んどそのままの状態で約100日の入院後世界された。大往生といえよう。御冥福を心からお祈りする次第である。

坪川家恒

宮地政司先生の思い出

昨年4月半の朝10時頃、仙川にある宮地先生のお宅を私はお訪ねしていた。数日前先生から、前年11月ニューデリーで開かれた国際天文学連合(IAU)総会の話を知りたいから来てくれるようにとのお電話を頂戴していたからである。この日奥様は生憎お留守であったが先生がお一人御在宅で至極お元氣であった。国内の委員会などですでに報告したIAU出席報告のコピーなどお渡しして、「時」や「地球回転」委員会の関連分野の最近の情勢などを御報告した。先生は熱心に聞いて下さった。雑談にも花が咲いて、岩波の小雑誌「図書」の中の准陰生という匿名の「固有の領土とは？」という一文を見せて下さった。「これが中野好夫のペンネームだということを知って初めて知ったよ、彼とは同級の仲でね。面白いから読んでみなさい」といってその小雑誌を貸して下さったりした。やがて帰意を告げた時は12時をすでにまわっていた。帰る前に一緒に食事をとることで、近くの朝鮮焼肉のレストランへ案内して頂いた。ここには時々お見えになるとみえて、てきぱきと注文されおいしい焼肉料理を御馳走して下さいました。この時の先生は、比較的小食の私などから見ると驚くほどの健啖ぶりであった。しかしこれが先生にお会いした最後と